

茅山宗教空間の秩序・歴史的発展のコンテクストの探求と再建 陶 金

注1… 陶金、北京の人、建築家。2007年にUniversity of Nottingham（イギリス）卒業。北京市道教協会理事、茅山道教文化研究中心副主任、上海市道教協會科儀保存項目組副組長。

はじめに

2009年春、江蘇省にある茅山道院の楊世華道長の見識と励ましのもと、筆者¹は茅山「崇禧万寿宮」の復元プロジェクトの建築設計業務を引き受けることになり、一年後、さらに「徳祐観」と「仁祐観」の復元作業も引き受けた。この三箇所の道観は特殊な地位にあるため、筆者はそれらの背後にある「茅山」および「上清派」について基本的な調査研究をせざるをえなかった。まず『真誥』『周氏冥通記』および元と清の二種の『茅山志』などの道教経典と関係の史料について閲読と抜き書きをすすめた。さらに、楊世華道長は1980年代において、当時なお健在であられた老道長に詳しくインタビューをしており、茅山の由来や宮観について熟知しているから、彼の教えをうけて、『茅山志』などの史料における晦渋難解な部分についても納得がいき、茅山について實質的な認識をえることができた。こうした認識が最終的に上述三箇所の道観の設計や布置に反映している。

2012年秋、茅山の保護者にあたる石継剛副市長が筆者にある仕事を委託した。それは、筆者が理解している茅山の古い姿に少し整理を加え、これからの茅山景区の全体的なプランニングの文化的な参考に提供せよというものだった。このため、筆者はしばらくこの課題に専心し、「江東の聖山——道教聖地茅山の形成と布置の研究」というスライド資料集を作成した。この仕事は最終的に石市長の認めるところとなり、彼の提案によって「茅山宗教歴史文化研究会」（仮）が立ち上げられ、茅山のこれからの文化的な整理と発展に有力な端緒を開くこととなった。

2013年春、東京の専修大学の土屋昌明教授一行が茅山に調査に訪れ、楊世華道長の紹介で、我々はもとの白雲観と五裡亭の旧址のあいだにある「茅山家園」という食堂でランチをともにし、茅山の洞天福地に関して意見交換をした。三箇所の道観の建築デザイナー、そして茅山の歴史地理の民間研究者として、筆者は土屋教授の依頼を受け、本論をものした。もって日本の諸賢が現地に進んでいる諸事について知って頂く助けとなれば幸いである。

筆者は建築専攻であって道教史の研究は専攻外であるから、執筆には大きなプレッシャーを感じている。それゆえ、本稿は学術論文の規範に沿っておらず、また地図上の定位も、完全に正確な座標的位置ではない。こうした点、ここで特に説明し、諸賢のご寛恕をいただきたい。

茅山の現状

歴史上、多くの兵難があったため、茅山の地上建築物の遺存は非常に少ない。1980年代、道士たちが山にもどった時、三宮五觀のうちわずかに頂宮（九霄萬福宮）、印宮（元符萬寧宮）、それに清末民國時期の建築および石彫が一部遺存していただけであった。下宮（崇禧萬壽宮）はダム湖で水没し、玉晨觀は廢れて村落に紛れ、乾元觀の遺址は林業の基地とされ、徳祐觀・仁祐觀・白雲觀は残っていなかった。多年におよぶ努力と發展の結果、頂宮と印宮は朱易經道長・楊世華道長そして茅山の道眾の手によって復興し、巍峨たる老君銅像が建立され、新たなランドマークとなった。茅山の鎮山四寶たる玉印・玉符・玉圭・呵硯も、道士たちの努力によって、あらためて山中にもどった。近年、句容市政府は特に「茅山風景區管理委員會」を設立した。この「管委會」の推進によって、茅山の觀光施設と基礎建設も相當に發展をとげている。第八大洞天たる華陽洞は泥抜き作業がおこなわれ、そのとき金龍などの重要文物が出土した。2011年から、茅山景區は國家旅遊局AAAAA級風景區的申請を開始し、それと同時に、景區主任の石繼剛市長は、特に楚王澗を主とする歴史的遺存物を復元すること、および新たに歴史資源を發掘することに力を入れる宣傳活動を始めた。それで前述したような筆者の仕事が要請されたわけである。

前提となるコンセプト

茅山景區内のすべての建設・プランニングと建築物單體の設計とは、茅山の歴史および宗教文化と呼應・繼承しているはずである。したがって、すべてのプランニングと建設を考える前に、茅山地區に沈澱した人文的歴史的情報を整理してはつきりさせ、千年にわたって形成された歴史發展のコンテクスト（時間レベル）と宗教空間の秩序（空間レベル）を見いだす試みをしなければならない。この基礎の上に、布置の効果と建築とをこの法則にてらして設計し、もって有形のプランニングと建築とを、無形の歴史的コンテクストおよびすでに消失した宗教空間の秩序に接續する見通しができる。ローマは一日にして成らずというが、茅山のプランニングと建設も一氣にできたのではない。我々にとってさらに重要なのは、歴史的責任感と使命感をもって、時間をかけてじっくりと子細に歴史資料を研究し、あわせて現地のフィールドワークへと赴くことである。かくして得たものは、空虚な體系にとどまらず、文獻と考古とが相互に證明し合うような真正の状態となる。新たに建てる宮觀については、もはやレプリカの形で設計して「にせ骨董品」を建てる必要はない。それにかわるような創造のほうが、よほど時代的意義を有するであろう。しかしながら、創造は傳統に對する理解と繼承のうえにおこなわれなければなるまい。いわゆる創造

もつについては歴史となるのであるから。

探索方法

このようなコンテキストと秩序を探究するためには、連続性の記録と数値データは欠かすことができない。北京大学の王宗昱教授の高弟である謝波博士が、かつて地図の方式によって劉大彬宗師の『茅山志』²⁾を研究した。その啓発のもと、我々の求める情報がそこに、清の笱重光編『茅山志』以上に多く収まっていることを筆者も見いだした。山志の情報から取り出せるものには限りがあるとはいえ、少なくとも茅山の主流の宗教動態と重大事件についてマクロの認識を得る助けとなる。

注 2…劉大彬『茅山志』、『正統道藏』洞真部記傳類。

発展のコンテキストと空間分析については、筆者は建築アカデミーで多く実践されているマッピング法（mapping）を使用して、情報に対して分類と提示をおこなった。第一歩として、現在の茅山の電子地形図を基礎とし、現状と山志および楊道長の口述を軸として、若干の山峰および歴史上重要な道観の位置を想定した。第二歩として、茅山の歴史をいくつか時代区分したものにもとづき、当該時代におこなわれた重要な宗教活動あるいは建築行為の地点について圓圏で表示し、もし当該時代に複数回の重修あるいは宗教活動があった場合は、複数の圓圏で重ねて表示した。つまり、一時代において圓圏が密集している場所は、それだけ当時の活動が旺盛だったことになる。この方法によって明らかになることがあるであろう。

空間地形の理解

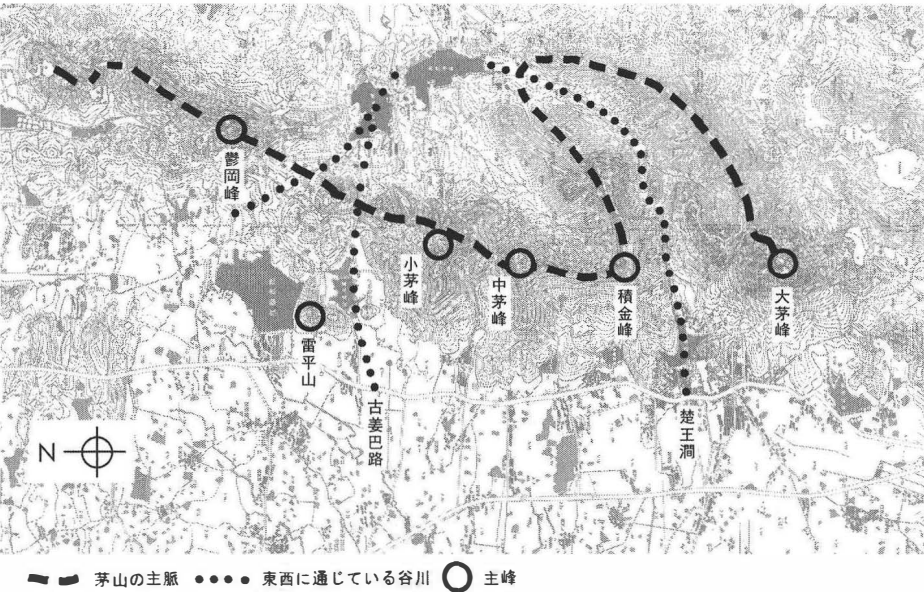


図1 茅山の主たる地理的特徴（便宜的に左を北とする）

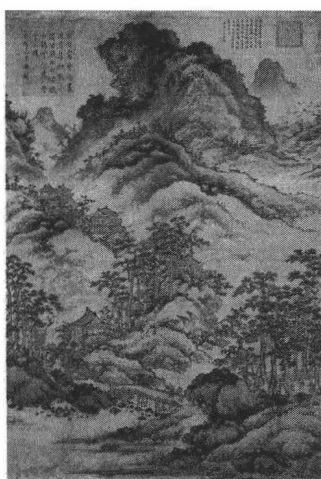
注3…陶宏景『真誥』、『正統道藏』太玄部。吉川忠夫・麥谷邦夫編、朱越利譯『真誥校注』北京：中國社會科學出版社、2006年。

注4…同前『真誥校注』346頁。

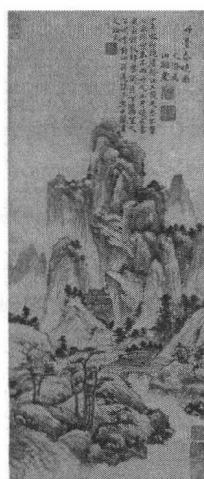
茅山の歴史文化の理解には、陶貞白（弘景）先生編の『真誥』³から着手すべきである。「稽神樞」には茅山の最古の地理的描寫が収録されている。その中で茅山の山脈の態勢を形容して「己」字形だとしているが⁴、図1において茅山の諸峰を觀察すれば、それに相應する事實がわかる。圖像觀察から茅山の地形の二要點がはっきりする。一つに、山脈は南北に走っており、三つの峰は南北にならんでいること。二つに、山澗が東西に走っており、大茅峰と積金峰のあいだが湾曲によって山澗を形成していること。この二つの茅山の地勢の特徴は相互に對立的であり、茅山の宗教空間の秩序に影響する重要な要素を形成した。そして、このような特徴は、山水畫家にもとらえられ、この對立關係が彼らの作品に描かれている。



五代 董源：《洞天山堂圖》



元 陸廣：仙山樓觀圖



元 陸廣：丹臺春曉圖



明 張宏：句曲松風圖

図2 茅山と関連する山水畫4作

注5…傳 董源「洞天山堂圖」傳 五代、台北故宮博物院藏、絹本設色、縱183.2cm、横121.2cm。王耀庭「傳董源〈洞天山堂〉、〈龍宿郊民〉初探」は、本作品の創作背景を議論し、あわせて作者および年代について疑問を提出している。『故宮學術季刊』第23卷第1期（民國94年秋季）225頁。

注6…陸廣「仙山樓觀圖」元代、台北故宮博物院藏、絹本設色、縱137.5cm、横95.4cm。

中央美術學院の博士課程學生である許彤氏は、「洞天」の圖像的表現を研究しており、彼女の教示で、茅山に一定程度關聯すると認められる山水畫の作品のいくつかを認識することができた。そのなかには、五代の董源の作とされる「洞天山堂圖」⁵、元の陸廣の「仙山樓觀圖」⁶、「丹臺春曉圖」⁷、および明の張宏の「句曲松風圖」⁸がある（図2）。筆者は美術ないし美術史の研究者ではないが、そこに見られる建築・山峰・山澗・橋などの構成要素の關係からすれば、この四作品はすべて例外なく上述の山峰と山澗の對立的特徴をとらえており、このような對立が地理的レベルのみならず、宗教的空間秩序においても體現されていることがわかる。

このほか、華陽洞天の五つの門について、周知とされる西便門のほかは、金壇市境内の南門をはじめ、いくつかの門について實地に調査する機會を持てなかった。華陽洞天の神學的意義は極めて大きいとはいえ、隠されているという

その特徴のゆえに、影響力は三つの峰には及ばない。また筆者の「洞天福地學」に對する研究の淺薄さゆえ、華陽洞天について深くは探究していない。この點については、日本の諸賢のご示教をいただきたい。

時間的接続点について

時間		人物	地點	事件
約前 2500 年	顓頊	玄帝顓頊	大茅峰頂	銅鼎の埋藏
約前 2300 年	帝嚳	展上公	雷平山 白李溪	修道と農桑
前 770-256 年	周	郭四朝	雷平山 郭幹塘	修道と農桑
前 210 年	秦	李明	鬱岡峰前	修道と煉丹
前 210 年	秦	周太賓 姜叔茂	雷平山北	修道
前 44 年	西漢 元帝初元五年	茅盈	下泊宮	二弟の待機
前 39 年	西漢 元帝永元五年	茅固 茅衷	茅山	大茅君に道を學ぶ
前 1 年	西漢 哀帝元壽二年	茅盈	茅山	受詔と登真
223 年	東漢 黃武二年	杜廣平	大茅山 雷平山	修道
316 年	東晉 建興四年	葛洪	抱樸峰	修道
364 年	東晉 興寧二年	楊羲 許氏父子	雷平山北	修道
470 年	劉宋 太始年間	王舉	雷平山北	長沙館建設
493 年	齊 永明十一年	陶弘景	楚王澗	華陽館建設
514 年	梁 天監十三年		雷平山 楊許宅	朱陽館建設
515 年	梁 天監十四年		鬱岡峰前	鬱岡齋室

分析の便宜のため、茅山の歴史を時代區分して探究する。『茅山志』の記録は大體つぎのように區分できる。先秦時期・漢代・魏晉・唐代・宋代・元代である。以下、この時代區分を基礎とする。

疑いなく、陶貞白先生は茅山の歴史において劃期的な意義を備えている。『茅山志』の記載にもとづき、貞白先生およびそれ以前に茅山エリアに出現した神仙および人物のだいたいを整理して表を作ってみた。これによって、彼らの活動について簡単に了解できる便宜となる。嚴格に考えると、これらの時期・人物・事件はすべて證據に乏しい。しかし、傳説は必ずしも虚構ではなく、つねにある歴史的事實を前提にしておこなわれるものである。そして、これらが「傳説の人物」であるからこそ、茅山のコンテクストのはじめとなり、茅山を「第一福地」「萬古の聖郷」とするために、最初期の神學的基礎をうつことになったのである。茅山および上清派の文化的コンテクストの發展は、いずれもこれを原點とする。

注 7…陸廣「丹臺春曉圖」元代、アメリカ、メトロポリタン美術館藏、絹本設色、縦 61.3cm、横 26cm。

注 8…張宏「句曲松風圖」明代、アメリカ、ボストン美術館藏、紙本設色、縦 148.9cm、横 46.6cm。

先秦：隠士の聚居区の出現

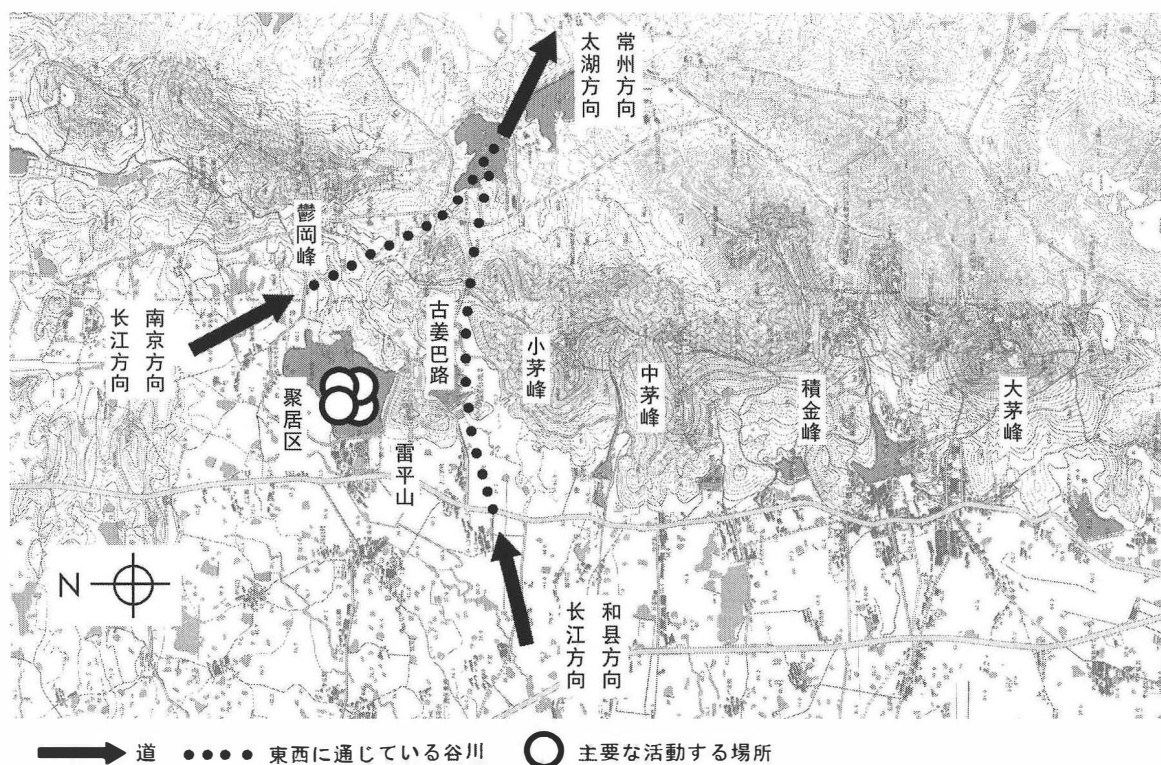


図3 先秦時期茅山北部の隠士の活動

紀元前 2300 年ころ、展上公が雷平山で耕作したことから始まって、周の郭四朝・秦の姜叔茂も雷平山附近に居住した。図3にある「聚居区」がそこである。煉丹をした李明真人が住んだ鬱岡峰は、距離的にそこから遠くはない。これらの人々は茅山最古の隠士たちとして知られているが、いずれも現在の茅山の宗教活動の中心からはずれた「北垂」にいた。こうした重複性は、ここの地形と位置を具体的に観察させるものがある。そこでつぎのような大膽な推測をしてみたい。

雷平山以北のエリアは、のちの楊・許の故宅でもあるが、かつては先住民の聚落であった。そこは北方の寒冷氣候をさけて南に遷った先住民が、長江を渡って東南方向に開拓を進め、長江を渡ってはじめて大山にぶつかった場所ではなかったろうか。農業機具や火が未發達の時代、漁獵はもっともおだやかな生存方法であり、このエリアの豊富な水資源および繁茂する山林（當時の茅山の植生は今日以上に繁茂だったはずだ）は、必要十分な食物を提供する來源であった。さらに、茅山山脈は南北に伸びており、ここだけが山越えに便利な谷口と

なっており、東西相互に通じ合える。それゆえ貞白先生も、ここに「小茅の後より延陵に通ずる大路有り」⁹と言っている。茅山は長江と太湖の中間に位置するから、東西を貫通する道路は、交通の便を提供するばかりか、ここに市場を形成した可能性もあるだろう。長江と太湖の間の物産がここに集められ、山中の薬草・鉱石などと交換された。さらに、貞白先生のつぎのようなコメントが、以上の推測をより強固にする。「長史宅の西北の長隱の小岡の下に、乃ち故破の瓦器有りて、焦赤土甚はだ多く、疑うらくは是れ人の居せる處ならん」¹⁰。したがって、聚落にせよ市場にせよ、雷平山は早い時期に茅山における人類の活動が集中したエリアの一つであると考えることができる。それゆえ、のちに許長史がここに来て居住したのも、曠野の荒れ地に住んだのではなく、村の中あるいは周辺だったのである。キリスト教の早い時期の沙漠修道者は、ふつつ村にたよりつつ生活を立てていたが、茅山の先秦時期の隠士たちも、おおかたこの村民だったのである。野蠻な時代にあって、この安逸な生活環境が、こうした隠士の來住をもたらし、その後の茅山を「第一福地」に列する基礎となったのである。

注9…同前『真誥校注』

414頁。

注10…同前、347頁。

漢代：「茅君」の人神両性性と空間区分

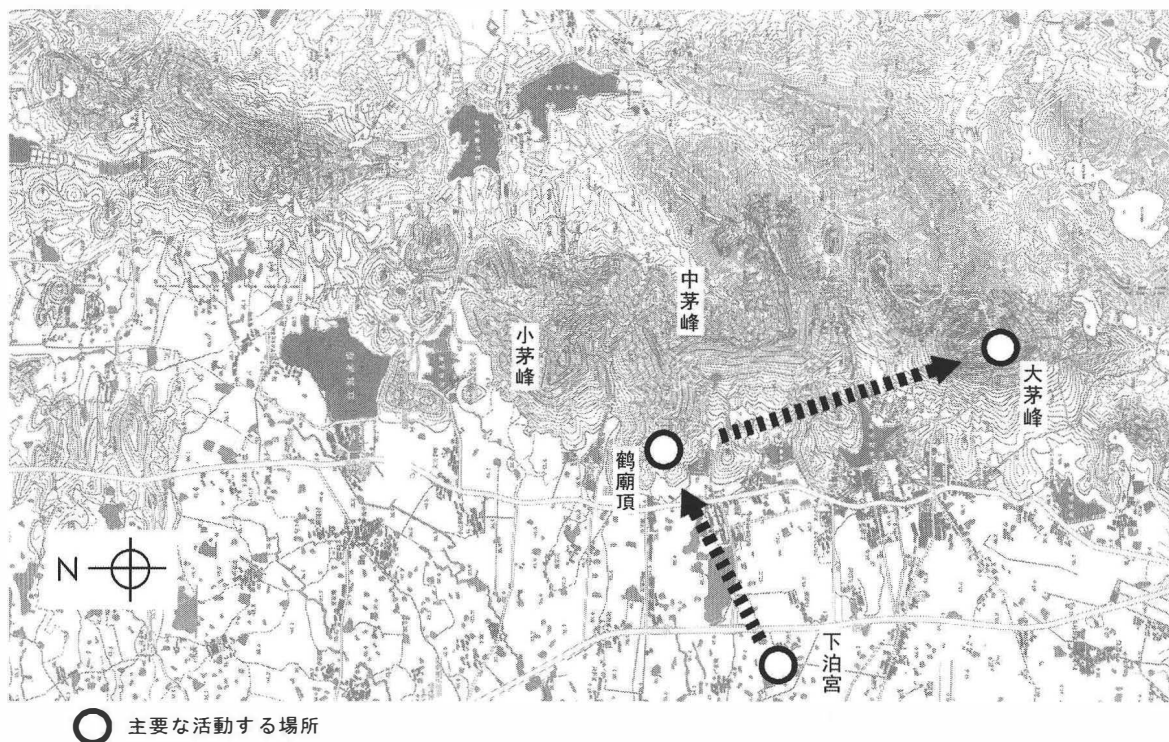


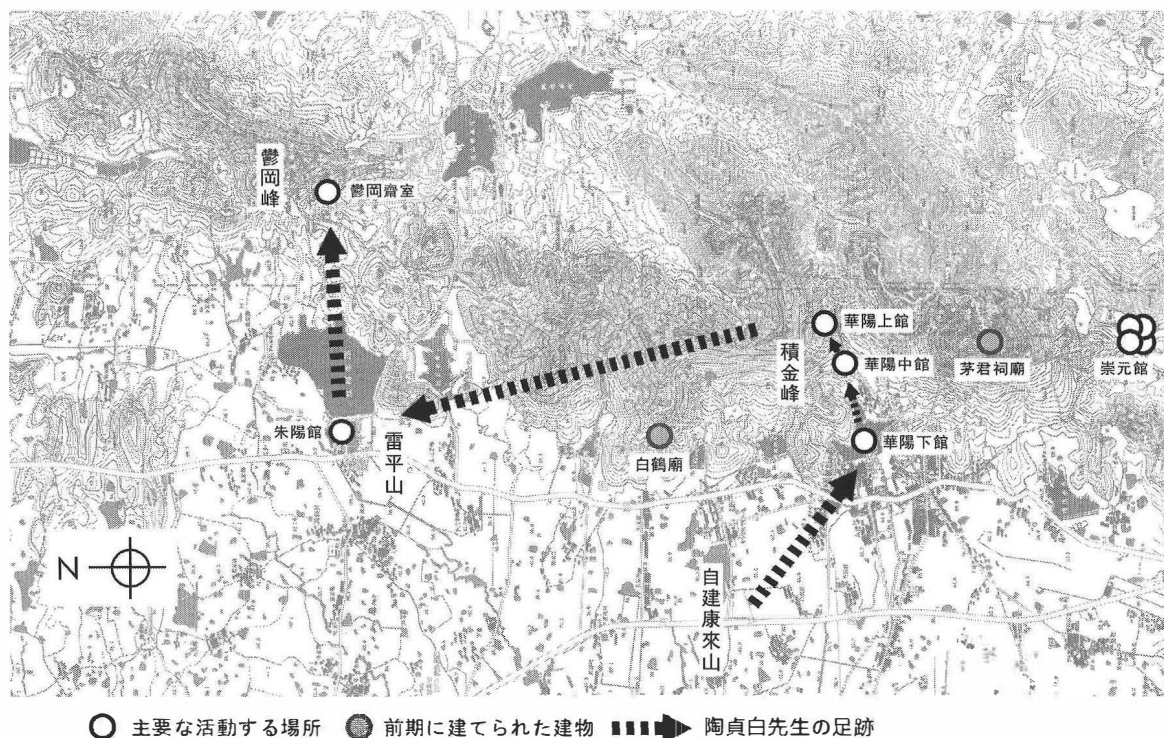
図4 漢代茅君の神化プロセスの転移

『茅山志』の記載によれば、BC44 年に大茅君は南渡して句曲山に来て、そこに居住して修道したという。その地は今日の「句茅公路」の西側、「下泊宮」という村である。1949 年以前、この村は茅山上清派の道観があり、前中國道教協會會長黎遇航道長がここで道長をしていた。BC39 年、大茅君が待っていた二人の弟たちも關中から江左に來た。こうしてのちに三君が得道し、それぞれ一峰を治めるという故事となった。三君の最古の祠廟は、實は今日參詣がもっとも盛んである大茅峰の「九霄宮」ではなく、中茅峰西側の「白鶴廟」であった。『茅山志』によると、當時、三君が昇仙したあと、人々はのちに「鶴廟頂」と呼ばれた山頂に祠廟を修築して祭祀したという。そこで地形を子細に見てみると、「下泊宮」と「白鶴廟」とは、基本的に山下から山上へ至る一直線上にある（図 4）。「下泊宮」から「鶴廟頂」へは、茅君がこの世の「人」から山上の「神」に変わったことを示している。

「白鶴廟」を端緒として、茅山周邊では陸續と茅君を奉ずる祠廟が建設され、そのうちの一つが大茅峰頂上の祠廟であった。しかし、政府側の祭祀場所はずっと「白鶴廟」を主とした。のちに三茅真君の信仰がしだいに遠く伝播すると、江南地區全體にその祠廟が分布するようになり、このため茅山も「茅君仙宅」という宗教的な身分を獲得した。「白鶴廟」はその原點にある。

図 5 魏晉時期の茅山道教の建築活動情態と貞白先生の隠居位置の変遷

魏晉：道教の正式な登場



茅君昇天後 494 年して、陶貞白先生が建康から茅山にやってきて、道士の生活を始めた。そしてみづから収集し得た『真誥』の神の啓示にもとづいて華陽上中下の三館を建設した。つぎのように言う。

大茅山、中茅山の相連なる長阿の中に、連石有り、古の時は名づけて積金山と為す。此の山中には甚はだ金物多し。其の處は人の住むに宜く、水有る處を求めて屋室靜舎を為るべきときには乃ち佳し。此の數處は亦た意に任せるのみ。快く丹を合して以て上道を修むべし。^{*11}

注 11…同前『真誥校注』

このうち華陽下館は、現在ではダム湖に水没した「崇禧萬壽宮」であり、華陽中館は今の華陽洞口附近にあり、華陽上館は古い道長たちが「華陽基」とっていた道士の墓所である。貞白先生は南遊ののち、茅山にもどって、楊・許の故宅である「長沙館」「朱陽館」を修築した。しかし、すぐに李明真人の煉丹井がある鬱岡峰のふもとに移轉し、「鬱岡齋室」を作った（図 5）。ここでの彼の活動の大部分は、浙江で完成できなかった煉丹を繼續したものであろう。貞白先生がここに移轉した主たる要因は、「合丹」のための水源を確保することではなかったかと思われる。彼はこう述べている。

此（積金峰）は即ち隱居の今住む所の東面の一横壑なり……復た一穴有り、湧泉は太はだ奇なり。但だ恨むらくは山西に在りて、自より東流するを得ざるのみ。……此の嶺の東南に一石穴水有りて、東流して極めて好し……甚はだ合丹に可なり。^{*12}

361 頁。

注 12…同前 362 頁。

貞白先生が最終的に鬱岡峰に落ち着いた目的は、秦の李明真人の煉丹井の井戸水を利用することにあつたのである。

彼の足跡につれて、茅山には一聯の道館が建設された。そのうち、曲林館はのちに「崇禧宮」となった。彼は華陽上館の別齋にいたが、そこは「元符宮」となった。「朱陽館」は「玉晨觀」、「鬱岡齋室」は「乾元觀」となった。貞白先生は一生、弟子は数えきれずおり、上清道法は廣まった。このため茅山はあらためて「上清の祖庭」という宗教的身分を獲得した。注意すべきなのは、この時期、山の南の崇元館も十分に活躍していたことである。ここは『真誥』の啓示で「大茅山の下に亦た泉水有り、其の下に靜舎を立つべし」^{*13}とある場所である。また同時に、ここは大茅峰を背後の山として南向きであり、修道にむいている場所である。つとに貞白先生以前の東晉時期に、すでに修道場所となっていた。したがって「崇元館」「朱陽館」「華陽三館」「鬱岡齋室」いずれにしても、その配置は、神の啓示という背景のもと、自然環境が人の居住（飲用水）に適しているか、修道（東流水・礦産・藥草など）に適しているかが先

注 13…同前 365 頁。

導的役割をしていることが見てとれる。

基本的にこの時期から、茅山の宗教空間において、上清派教團を代表とする道教教團が、楚王澗を主軸とする発展段階に入った。この時期、大茅峰頂上の「茅君廟」は、必ずしも道士によって祭祀管理がおこなわれていたとは限らない。その地の人々が共同護持する民間祠廟であったように思われる。ただし、その影響力はかなり大きく、祭祀の時期には人も物も多く集まったらしい。貞白先生のコメントにこうある。

唯だ三月十八日には輒ち公私雲集し、車は數百乗も有り、人は將^{ほとん}ど四五千、道俗男女、狀は都市の衆の如くなれど、看人唯だ共に登山して靈寶唱讚を作すのみ、事訖れば便ち散ず……終に専心自達するを得る能はず、此くの如く抽引して恩を乞はしむれど、因りて果を得ること無し。唯だ隱居の住む所の中巖は、禁斷清巖にして、遊雜無きを得るは、既に洞を去ること嶺を隔て、人自より此に至るを知らざればなり^{*14}。

注 14…同前『真誥校注』
364 頁。

ここでいう「登山」は「大茅峰」のことである。『茅山志』には「大茅峰……三月十八日……四方の人の來山禮覲して盛んに靈寶齋の事を作すこと、今も古も^{かわ}渝らざるなり」^{*15}とある。廟内の活動は主に民眾が參與していたであろう。それゆえ、楚王澗内の上清教團と對立的である。このような對立は地形の特徴と相互的であり、のちに茅山宗教空間の二つの主軸を形成する。

注 15…劉大彬『茅山志』、『正統道藏』第五冊、583a 頁、上海：上海書店、1987 年。

唐代：皇室の贊助と全面的發展

上清第十代宗師王法主（遠知）は徳高く、唐帝室との私的なつきあいを背景として、唐初はやくも新政權の承認と支持を得た。「華陽下館」は敕によって「太平觀」とされ、第十三代宗師李玄靖先生の時には、さらに玄宗皇帝の敕修を得た。こうした支持力のもと、太平觀は唐初の茅山道教の中心にかけのぼった。晩唐になると、太平觀は火災のあとに重修された。図 6 で太平觀に圓圈が三つあるのは、こうした三回の重建を表わしている。

崇元館と朱陽館の二箇所の情況も、これと類似している。太宗・玄宗の二朝で敕修があり、觀とされて崇元觀と紫陽觀となった。とくに紫陽觀は玄靖先生の居所として玄宗の特別扱いをうけた。このほか、もともとあった「白鶴廟」と「華陽上館」も玄宗の敕修をほどこされ、それぞれ「祠宇宮」「華陽宮」とされて、専門の道士が置かれた。つまり、唐代まで政府側は、三君の祭祀を依然として「白鶴廟」でおこなっていたことがわかる。

帝王以外に、唐代の士大夫が宮觀建設に參與している記録も多くなってくる。「下泊宮」「華陽中館」「鬱岡齋室」はいずれも士人階層の支援を得て重修して

おり、「鬱岡齋室」は名を「棲真堂」とあらためた。唐代茅山道教の發展を概観すると、まず長安の皇室、とくに太宗と玄宗のときに賛助を得て、王法主と李玄靖という二宗師の影響のもと、茅山に對する資金投下は大きく、太平觀・崇元觀・紫陽觀はそれによって當時最重要の道觀となり、ちょうど『真誥』と關係する山北・山中・山南に分布した。楚王澗の軸のそのほかの二道館も士人階層の支援をうけて修築された。三茅真君を祭祀する場所として、白鶴廟は敕修と昇格を得た。とはいえ、上清派道士に對する政府側の熱意は、茅三君への信仰よりまさっていた。要するに、唐代以降、茅山の建設は朝廷の賛助を得られるようになり、すでにあった宗教活動の場所はすべて修築・強化され、宋代の全面的な繁榮へと基礎固めがおこなわれたと言えるであろう。

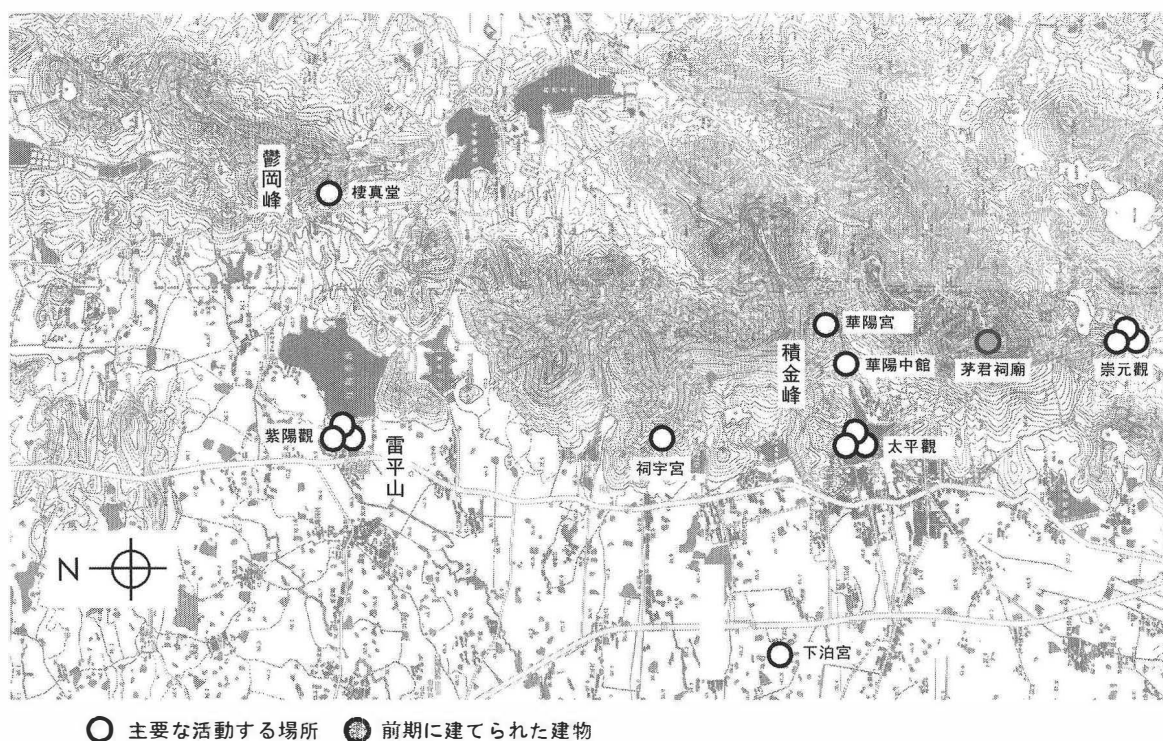


図6 唐代茅山道教建築の活動情態

宋代：両軸秩序の確立

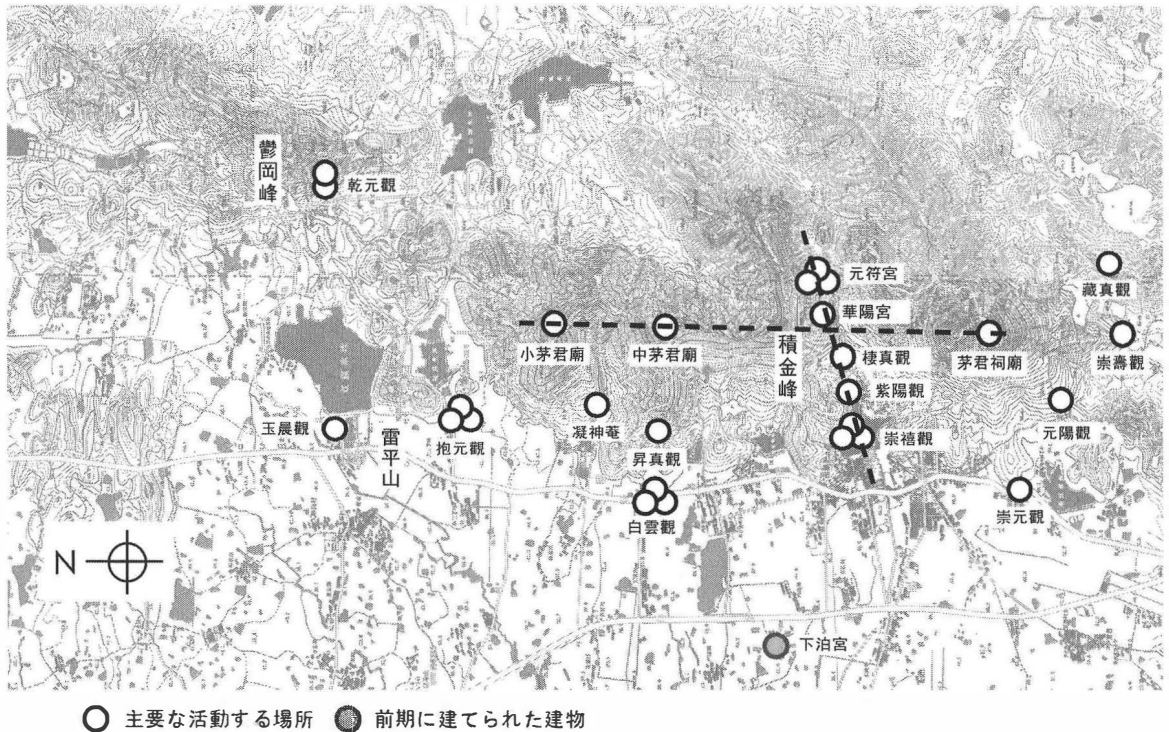


図7 宋代茅山道教建築活動の情態と兩軸

宋代は茅山道教の全盛時代であり、その主たる施主はやはり皇室であった。山の中部、楚王澗のラインでは、宋初に真宗皇后が二十三代宗師朱觀妙先生から法籙を授かったので、敕修して「天聖觀」とされた。すこしのちの第二十五代宗師劉混康の居住した「潛神庵」は、哲宗のほか、とくに徽宗の敕修と改修をへて、「元符萬寧宮」の額を賜り、「上清宗壇」とされたところである。南宋時期、さらに高宗の敕修と理宗の賜額があった。つぎに、元符宮の「龍王」および「使者」も神號の賜封をうけている。楚王澗の中部に位置する華陽中館「棲真觀」は、徽宗の賜額を得た。最も下方に位置する太平觀も賜額され崇禧觀となり、南宋時期に重修されたほか、賜額が二回あった。このほか、同一軸上の「華陽宮」と「紫陽觀」も士人階層の資金援助で修復されている。

山南では、悠久たる歴史をもつ「崇元觀」が真宗の賜額をうけて「崇壽觀」とされたほか、士人の賛助によって「崇元觀」（古崇元觀はすでに名を改めている）と「元陽觀」が修築された。「藏真觀」は劉宗師の仙塚として敕建されたものである。山の北側では、「紫陽觀」は真宗の時に賜額があって「玉晨觀」とされた。「鬱岡齋室」は朱觀妙先生によって増築され、賜額を得て「乾元觀」

となった。

山の西側では、宋代に陸續として新しい道觀が出現した。もとあった祠宇宮が重修されて「昇元觀」と改名されたほか、凝神庵・白雲觀・抱元觀が文獻にみえる。白雲觀・抱元觀の活動が比較的盛んで、宋代において、創建と重修と賜額の三段階をへている。

『三茅真君加封事典』^{*16}には、宋の理宗が茅山の三茅真君に聖號を加えた儀式の詳細な描寫がみえる（徽宗の崇寧年間に加封があったが、その儀式の詳しい描寫はない）。當時の記載によれば、この儀式において、茅山の三峰「各おのに儀獻を進む」とある^{*17}。ここから推測するに、當時の中茅峰と小茅峰の頂上には、必ずやすでに祠廟があったのであろう。しかも『茅山志』によれば、元代には中茅峰と小茅峰には賜額をおこなっただけで、新たな建設はない。元代に柱礎の遺存しかなかったとしても、それ以前に廟がなかったとは言えない。したがって、これは茅山三峰頂で政府側の宗教活動がおこなわれたことを示すはじめての記述であり、この時から、大茅・中茅・小茅の三峰が構成する軸線が、正式に浮上してくるのである（図7）。これに相對して、鶴廟頂の祠宇宮の記録は宋代以降には見いだせなくなり、現在に至るまで痕跡は消える。この背後にあるのは、やはり「三君各おの一山頭を占める」という傳説である。

宋代の茅山宗教空間の發展を概観すると、唐代の皇室が資金援助した傳統が繼承され、それは具體的には真宗・徽宗・理宗の三朝に集中していることがわかる。その対象は朱觀妙・劉混康という二人の宗師の受賜を主とする。理宗の時代は、三茅真君への加封という形式によって茅山を支持するやり方の先例である（徽宗のときも加封があったが、宗師の崇敬が主だった）。朝廷は大型の宮觀の幾つかにメンテナンス資金を提供したほか、そのほかの中型の道觀には賜額という形で資金提供し、その回数は唐代を大きく上回る。楚王澗のラインでは、「元符萬寧宮」が「上清宗壇」という身分を確立させられ、上清教團の屬性も正式に確立された。山の南側と西側では、中・小型の宮觀が陸續と出現し、比較的旺盛な活力を維持した。ここから推測すれば、當時の茅山の周囲は、すでに廣く各種の道院が分布していたのであろう。

最も重要なのは、政府側がはじめて大茅峰・中茅峰・小茅峰で政府の祭祀活動をおこなったことである（崇寧の加封の詳細は不明）。これによって、茅山三峰が構成する南北に走る軸が決定される。華陽三館が構成する楚王澗の横軸〔東西軸。本論地圖は東を上になっている〕を「上清教團軸」とすれば、三峰が構成する縦軸〔南北軸〕を「茅君祠廟軸」と呼ぶことができるだろう。このとき、大茅峰の頂上の民間祭祀のやり方は、政府側が認めている道教祭祀のやり方にとって代われ、管理權も上清派教團の手になったはずである。しかし、根本的な性質からすれば、山頂でおこなわれる「祭祀」はやはり山澗でおこなわれる「修煉」とは對立的である。べつの角度からみると、祭祀の管理を受け持つ

注 16…張大淳『三茅真君加封事典』、『正統道藏』洞真部譜錄類。

注 17…張大淳『三茅真君加封事典』、『正統道藏』第三冊、338 頁下、上海：上海書店、1987 年。

ていた法師は道法の修煉者ではあるが、道法を修煉していた道士はやはり茅君の信徒であるから、兩軸の對立は、この點で調和し統一していたのである。

元代：秩序維持の発展と強化

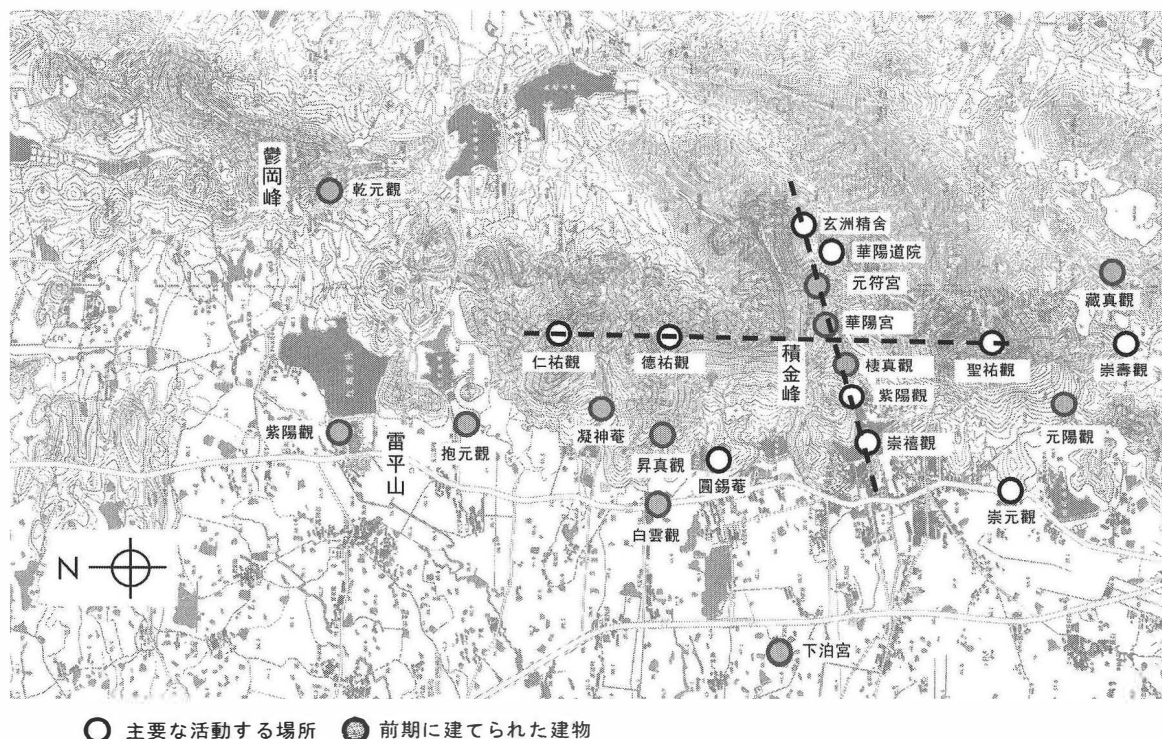


図8 元代茅山道教建築活動情態と兩軸

元初、上清第四十四代宗師の王牧齋真人は大都に朝覲したが、真に茅山と朝廷を結びつけたのは龍虎山道士の玄教宗師吳全節である。彼は三回にわたって茅山に至り、モンゴル皇帝にかわって齋醮に参加した。三茅真君への加封、『茅山志』の編纂はいずれも、この時の彼の發起による。元代の茅山道教は、基本的に宋代に形成された兩軸にもとづいて發展し、それを強化するものであった。楚王澗の「上清教團軸」上の「崇禧觀」は、賜額されて「崇禧萬壽宮」となり、この軸は東へ延伸して、より奥まった「華陽道院」「玄洲精舍」が出現した。三峰の「茅君祠廟軸」では、茅君の聖號が加封されるような名義的なものだけでなく、祠廟も朝廷の賜額をうけ、「聖祐」「德祐」「仁祐」の三觀ができた。同時に、朝廷は資金を出して建築を重修した。これ以降、茅山三峰頂上の茅君祠廟は一般の祠廟とちがって正式な道觀に昇格して、宗教的な地位は上昇した。このため縦軸〔南北軸〕の力は強化されることになった。山の南の「崇壽觀」「崇

元觀」も重建され、山の西にも圓錫庵が新築されたとはいえ、全體的に見れば、主たる發展はやはり兩軸上にあった。

まとめ

以上の研究において、「上清教團軸」[東西軸]と「茅君祠廟軸」[南北軸]の茅山での形成と發展を窺うことができたであろう。茅山の幼少期には、修煉する隱士にせよ、茅君への祭祀にせよ、この兩軸にそって發展したものではなく、「雷平山」と「鶴廟頂」という二原點においてであった。茅山の成長過程において、兩軸が次第に形成された。一つは山嶺と山澗の地理的特徴のしからしむるものであり、もう一つは『真誥』中の啓示および茅山の地元の茅君傳説による。

茅君登真ののち、その祠廟はもとの居所だった「下泊宮」ではなく、「鶴廟頂」に鎮座した。これは、山頂エリアを神に歸せしめ、山下のエリアは人に屬させることであり、このような對立關係はずっと存在しつづけた。民間で茅君信仰が盛んになるにつれ、神學的な意義を備えていない「鶴廟頂」は次第に、神學的意義を強く備えた「大茅峰」にその地位をゆずっていき、最終的には民衆が祭祀に參與していた「大茅峰」頂上で朝廷が祭祀をおこなうようになり、これと同時に、「大茅峰」と並列的なものとして地位の向上を得た「中茅峰」「小茅峰」が、「茅君祠廟軸」を形成するようになった。それは、茅山の南北に走る山脈の峰の頂上を占めている。つまり、三君への崇拜と祭祀が「鶴廟頂」という原點から「三峰頂」へと移轉したのは、この秩序がたちあがる過程の、その背後で神學と人々の信仰とが主たる作用を及ぼしていたとも言えるのである。

茅山で修行する道眾は、最初は雷平山エリアに集落を作っていた。これは茅山上清教團の原點でもある。陶貞白先生ののち、大部分の修道者たちは楚王澗ラインの華陽三館が構成する「上清教團軸」に集住していた。その原因は、一つは山澗の間で隱棲に便利だったことが関わっている。もう一つは、「中茅君」が『真誥』でこの水土が修道に適していると示したためである。この軸上には、のちの元符宮・崇禧宮など、明らかに上清教團の特徴を備えた宮觀ができ、茅君の民間祭祀とは直接的な關係を持たない。歴代の上清宗師にも、三峰頂の祠廟に長住したり起居して修煉したりした記録はない。

つぎに特に討論しておきたいのは、雷平山-玉晨觀エリアである。ここは、『真誥』の降授した地點であるばかりか、茅山上清派道教が先秦の隱士神仙たちと「つながる」原點である。これまで討論してきたように、ここは水土が豊かで、真仙得道者も多く、それゆえに「第一福地」とされていた。楊・許がここを選んで居住したのも偶然ではない。おそらく當時その名を慕ってここにやってきた修道者は多かったであろう。葛氏道や于家道もそのなかにいたかもしれない。楊・許は福地に居住して道を成就した。福地という地縁によりつつ、上は先秦の方仙道とつながって、彼

らの神仙の位業は「よるべき」「合法的」正統性をえた。彼らによって伝えられた『真誥』も、それゆえに正統性を確立したのであろう（『真誥』に上古の神仙が大量に現われるのもそれゆえである）。茅山の宗教が論理的にスムーズに「上清派道教」に組み込まれたのも、茅山ののちの宗教空間秩序の構築にとって根據となった。茅君信仰と祭祀の原点たる鶴廟頂が「茅君祠廟軸」に取って代わられたのとはちがって、上清教團の原点たる雷平山—玉晨観エリアは、「第一福地」という神學的地位によって、歴史上ずっと衰退しなかった。ただし、宋以後はだんだんと楚王澗の「上清教團軸」の盛んさにはかなわなくなり、明代になると、外來の全真教に使用されることになる。

また、兩軸の形成には前後関係があることもわかる。「上清教團軸」は貞白先生の時期にすでに形成されはじめたが、「茅君祠廟軸」は宋の理宗が三茅真君に加封してから史料に現われる（それ以前に三峰の頂上で祭祀活動がおこなわれていなかったわけではない）。おもしろいことに、宋の理宗以後、朝廷は宗師や道士に直接、封賞や宮觀を修繕してやるようなこと（唐の玄宗や宋の徽宗のように宗師個人への報償のこと）をしなくなる。モンゴル皇帝は宋の理宗のやり方を繼承し、聖號を加封するという方式で「茅君祠廟軸」の三峰の宮觀を敕修している。この時、兩軸の發展には交替がおこり、横軸〔東西軸〕の發展はだんだん緩慢となり、縦軸〔南北軸〕は力強く盛んになっていく。最後に明代になると、大茅峰頂の聖祐觀は敕によって「九霄萬福宮」とされ、縦軸の發展はこれをもって頂點に至る。兩軸の發展の交替を通して、上清教團と茅君信仰との間でリレーがおこなわれていることがわかる。また、このような二重構造のゆえに、茅山の宗教活動と傳承は近代に至るまで盛況を保持できたのである。兩軸以外に、山の南の重要な道觀たる崇壽觀、山の北の乾元觀と玉晨觀が、神の啓示と直接的な關聯を有しているのも重要である。

再建の実施方法

以上、茅山宗教空間の原点および兩軸のコンテキストを述べてきた。これによれば、茅山の歴史における主要な祠廟と宮觀の分布も、基本的にこの兩軸線によって布置されていることがわかる。したがって現在、茅山の文化的コンテキストと宗教空間の回復に着手するとすれば、真っ先に問題となる任務は、この兩軸を再構築することである。

「茅君祠廟軸」の基本的な再構築



図9 簞重光『茅山図』にみえる二（中）茅峰と三（小）茅峰

大茅峰の「九霄萬福宮」はすでに修復をおえ、筆者が請け負っている中茅峰の徳祐観と小茅峰の仁祐観も本年〔2013年〕四月に正式に落成した。その布置および信仰内容は、すべて三茅真君信仰系から出発し、「九霄宮」「太元寶殿」の両側の三宮五府神位の配置を参考にしている。徳祐観では中茅定録君の両側に定録府の官吏を陪祀し、仁祐観では小茅保命君の両側に三官保命府の官吏を陪祀した。

同時に、「徳祐観」の再建において筆者は、元明清三代の遺址の保存および傳統的宗教空間の現代的解釋に建築設計の重點を置いた。連續的な波動と透光性の屋面が、もともとの道觀の輪廓を描出するようにしてある（図10）。これについて、すでに部分的ながら文化財保護學界や建築界の人士から評價を得ている。

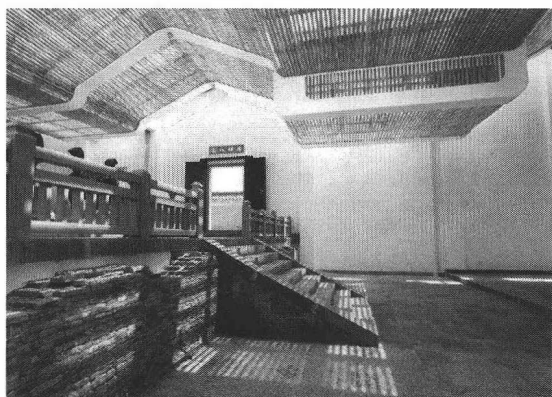


図10 中茅峰徳祐観の遺跡保護



図11 小茅峰仁祐観の遠景と峰頂の亭子

「仁祐觀」の再建では、図9の笄江上先生「茅山圖」にみえる三茅峰頂にある亭子らしき建築物に特に留意し、現地の古老の回想をもとに再建した。これにより、この軸上の天との際のラインを強調した。『真誥』によれば、小茅峰の高い地点は、後漢の光武帝が使者に命じて、三君に奉獻する黄金を埋藏したところである。そこでこの亭に「奉金」という語を用いて命名した（図11）。

「上清教団軸」の基本的な再構築

かつて上清宗壇とされた「元符萬寧宮」はすでに楊道長の手で修復され、筆者が請け負っている「崇禧萬壽宮」の新築プロジェクトもまもなく竣工する。新築の崇禧宮はやはり楚王澗の中にあり、旧紫陽觀の青玉峰の下の旧跡を襲用している。施工現場で、工人が唐代の青瓷の破片と宋代の「大觀通寶」を発見した。明代の「華陽洞靈宮」が崇禧宮にとどまったという伝統によれば、新築した「崇禧宮」は未来の上清派の傳法の中心となることになる。



図12 建造中の崇禧萬壽宮の主殿と青鸞、白鶴閣の外景

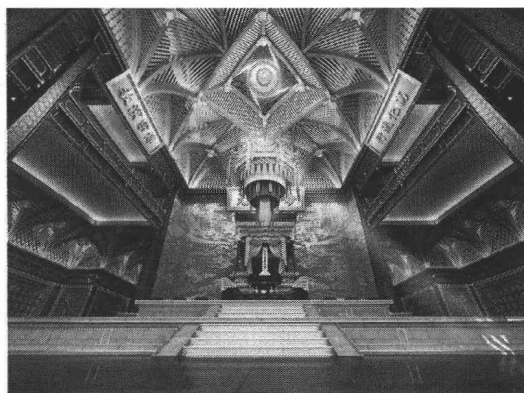


図13 崇禧萬壽宮主殿のコンピュータ・グラフィック

主殿では「上清道祖大洞至尊元始天王紫霞虛皇道君」の神主を供奉する（図13）。神主の両側には傳度授籙の八位の大師寶座を列する。殿の後に寶閣を設け、上層には本山茅氏三君を奉じ、下層には上清太玄真魏楊許三師を奉じ、さらに陶貞白および劉混康の二位の宗師を陪祀する。虛皇殿の前左右には「青鸞」「白鶴」の二閣を設け、左昭右穆の序列によって、上清歷代嗣教宗師を供奉する（図12）。殿の後左右には、「鬱儀」「結璘」の二閣を設け、「上清高奔日月大法」中の日宮月府神君を供奉する。この兩儀をもって、虛皇の無極を際立たせる。虛皇殿の真東には、「上清法籙院」を建て、院内は三洞の次第にそって、「洞神殿」では天師および王趙二真君を供奉し、「洞玄殿」では「上古靈寶經籙度三師真君／靈寶演教五師真君」を供奉し、「洞真殿」では「上清七傳聖師道君」を供奉する。かくして三洞法籙の骨組みはおおかた具備され、しかも上清系の

神傳・人傳の祖師もそこに供奉され、横軸〔東西軸〕で具備されるべき上清教團の特徴は十分に明らかになる。

そのほか、「元符宮」と「崇禧宮」の間に、華陽中館と華陽上館がまだ回復されていない。これについては、さらなるフィールドワークと論證が必要である。華陽洞西門洞口を考慮するよう石市長は特に注意を喚起している。そこで筆者は楊道長と検討の結果、今のところ暫定的に「玉柱洞」の洞口に玄宗の受籙記念の標識を設け、華陽洞口にすでに存在するレプリカ式の建築内に「投金龍玉簡儀」の展示とその情景の模型（歴史考證をしっかりとこなったアニメーションあるいは地形図の模型）を設置することにした。要するに、茅山にかつて存在した歴史遺跡および歴史を主として、いかなる新來の概念も添加しないようにする。



図14 プランニング：楚王澗（上清宗壇軸）の一部歴史建築の再建と水上参道の計画、崇禧宮（左）元符宮（右）

現在、楚王澗にもともとあった参道の復原事業も提出されている。戦後、茅山地区では楚王澗下流の「丁公山」と「華姥山」の間に「東進ダム湖」が作られ、崇禧宮は水没した。ダムが、入山の参道と联接する「南鎮街」とを切斷している。この街は南京方面から入山する千年來の古道であり、「上清教團軸」の體現でもあった。これについて、筆者は初歩的なプランをかりに提出している。現存する南鎮街の古い街路（レンガ路面や白鶴泉などの歴史建築物）を保護し、ダム上に渡し場を設置し、参詣者を船によってのみ彼岸の「崇禧宮」に渡れるようにする。こうすれば、水没してしまったもとの参道を水面で通行する形で復元することができる（図14）。このような虚と實の間の交替と組み合わせは、聖地へ赴く路線を回復するだけでなく、南鎮老街および参詣の入口も新たに復活させることができ、楚王澗のラインの「上清教團軸」を強化することになる。

茅山は上清の祖庭であり、玉晨觀は茅山の祖庭である。現在の玉晨觀はすでに人口の多い玉晨村となってしまった。しかし村民の回想によれば、建國初には道觀中で巍峨たるレンガ建築だった無梁殿はまだ存在したらしい（のちに村民はレンガをこわして民居の建材にした）。筆者は何度も玉晨村を調査した。玉晨觀の東側には數十年前にダム湖が建設されたため、エリア全体の形態はもはや破壊されている。しかし、細部の自然形態は依然として存在しているようである。たとえば、玉晨村の南側にある池を、村民は「觀塘」と呼んでいる。おそらく周子良真人が白龜を獲たところであろう。

玉晨村の歴史は短かく、村内の民居の建材は多く玉晨觀に使われていたレンガである。無梁殿で使われていた尺寸のレンガを至る所で目にすることができ、あるものには銘文すら見られる（図 15）。

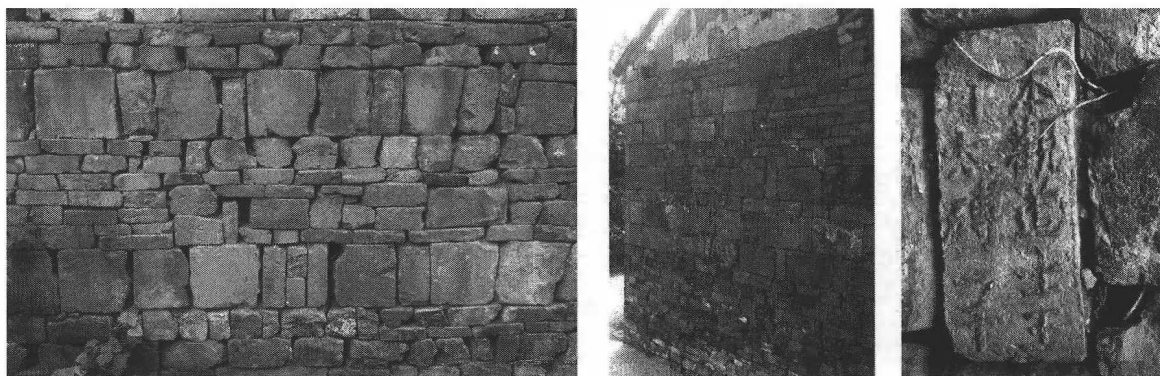


図 15 玉晨觀遺址現状

したがって、茅山祖庭たる玉晨觀を回復するという遠大な計画のためには、まず組織的に居民を移轉させ、専門の職人を組織して民居の解体工事をおこない、すべての古レンガを取り出さなければならない。そののち、村民の口述をたよりに、玉晨觀の範囲内で考古學的な發掘をおこなう。玉晨觀の年代は古いため、複数の時代の建築基礎あるいは文化層が發掘される可能性が高い。と言うのは、ここの東側の金壇境内には、かつて茅山九霄宮の下院「三星觀」「王母觀」があったが、最近、そこで道觀原址の一部の敷地に大規模な新石器時代の集落跡が發見され、あわせて複数の時代の墓葬 1001 基が發掘されたのである。したがって、玉晨觀の遺址附近にもこうした古い遺跡が出土するかもしれない。もし新石器時代の遺跡が出土した場合、茅山地區の實際の人類活動の年代がより古くなるばかりか、第一福地の今後の観光資源としても耳目を引くことになる。

玉晨觀の建築の再建については、整理して得られた古レンガの再利用をして、第二の生命を燃やせるよう考慮すべきであろう。建築の風格は傳統的な古典建築に拘るべきではなく、「崇禧萬壽宮」「徳祐觀」「仁祐觀」のプロジェクト

トに準じて、伝統的な規格と設計思想にもとづきながらも、現代的な建築表現を用い、古レンガを使って現代の美感と建築技術にふさわしい宗教建築空間を創出すべきである。玉晨觀には歴史上、「昭真臺」「天尊殿」「老君瑞像殿」「無量殿」「三官殿」などの建築があったが、それらをすべて再建すべきである。こうすれば、玉晨觀は考古と建築と宗教文化が一體となった、きわめて特色ある宗教的人文景觀の建築群となり、茅山北邊の輝かしいポイントとなるであろう。

工事の展望

茅山地區の文化および文化財をよりよく發掘するために、「茅山風景區管委會」と「茅山道院」は、2013年6月に聯合して「茅山道教遺跡考古小組」を立ち上げ、「茅山宗教歴史文化研究會」の下に置いた。小組は石繼剛市長を顧問、楊世華道長を組長として、『茅山志』ほかの文獻を底本としつつ、茅山に現有の山峰・井塘・宮觀遺址について一つずつ考察し、すでに滅んでしまった宮觀の遺址を再建するのに役立てようとする。このほか「研究會」準備チームは、茅山に現有の歴史文化資源について全面的な整理と保存を計劃し、あわせて「三茅真君信仰と祭祀」のテーマを國家級あるいは江蘇省級の非物質文化遺産として申請する。こうしたことを肅々と進めていくことになるであろう。

(原文：中国語 翻訳：土屋昌明)